

奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について

高桑 登

1 はじめに

中世後半から近世初頭の奥羽南半で出土する内耳土鍋と瓦質播鉢について、その分布範囲が戦国大名伊達氏の領国に重なることが指摘されている(飯村 1997)。また、瓦質播鉢と伊達氏の家紋である三引両を描いた漆器の分布範囲の共通性から、「食膳具や調理具など在地産の共通分布圏」の存在が指摘されている(高橋 2002)。

本稿ではこれらの検討をうけて、中世後半の奥羽南半で出土する内耳土鍋、瓦質播鉢、三引両文漆器と、当地域で出土する特徴的な形態の露卯下駄の4種類の遺物について集成を行い、その分布について若干の考察を試みる。対象とする地域は宮城県、福島県の全域と、山形県置賜地方である。

2 遺物の特徴と分布

(1) 内耳土鍋(図1・2)

焼成は土師質で瓦質のものも少量ある。口径30cm前後、器高15cm前後のものが多く、2:1単位の3つの把手が内面につく。体部が内耳取付部の下で屈曲し外反する。外面に煤が付着しているものが多い。

筆者は山形県内の資料から、15世紀末から17世紀初頭にかけて、体部の屈曲が明瞭なものから不明瞭なものへ変化し、新しいものほど内耳の横断面が円形に近くなるという変遷を想定している(高桑 1998,2003)。

宮城県内では2遺跡からのみ出土している。2の熊谷館跡出土のものは、内耳が口縁部より下がった位置につくもので東北地方では類例が認められない。前述の拙稿では関東地方の内耳土鍋との器形の共通性から、点的な搬入品の可能性を指摘した(高桑 2003)。

山形県内では、米沢盆地に出土遺跡が集中する。内耳横断面が円形または三角形に近い円形で、内耳の取り付け部が円錐状に広がるものが多い。口縁部の形状は多様であるが、断面方形状になり口縁端部が外傾または水平になるものが多い。これらの特徴は7の仙台城出土品に

も共通しており、米沢からの搬入品の可能性がある。

伊達氏領国以外では山形城の三の丸にあたる城南一丁目遺跡から出土している。仙台城とともに17世紀初頭の年代観が想定されている。この時期に茶との関連で分布域が広がる可能性を指摘している(高桑 2003)。

福島県内では、信達盆地から田村地方に出土遺跡が点在する。内耳縦断面が丸みを帯び、横断面がやや平たいものが多い。内耳取り付け部は扇状に広がり、口縁部内側が張り出すものが多い。

山形県内と福島県内で出土する内耳土鍋は、基本的な器形は共通するものの、内耳の形状等細部は異なる点が多く、各地に異なった生産体制が存在していたと考えられる。

(2) 瓦質播鉢(図3・4)

焼成は瓦質で黒灰色のものが多く、赤褐色の土師質のものも認められる。卸目のない捏鉢も少量認められるが、大半のものには卸目が施される。福島県内出土資料を、口縁部が端反りとなるⅠ類、口縁部内側が張り出すⅡ類に分類し、Ⅰ類が15世紀後半から16世紀前半、Ⅱ類が16世紀後半との年代観が示されている(山中 1996)。

宮城県内では黒川郡や仙台城周辺に多数分布する。山中Ⅱ類の割合が多く、中でも器壁が厚く径が小さい一群が認められる。Ⅰ類の口縁部は、水平方向に強く張り出すものから、緩やかに外反するものまで多様である。

山形県内では内耳土鍋に比べ出土遺跡が少なくなる。Ⅰ類が少数認められるほかは、Ⅰ・Ⅱ類に該当しない口縁端部が水平になるタイプが主体となる。

福島県内では、Ⅰ類の中でも端反部分が丸みを帯び、玉縁状となるタイプが伊達郡北部を中心に認められる。

Ⅰ類の中でも口縁部が外側に大きく張り出すタイプ(山中分類Ⅰa類)は、卸目上端部をフック状に折り返し、口縁部下に部分的に横方向の卸目を入れるものも多く、このタイプは宮城、山形、福島各県に広く分布している。ある程度広域に流通したか、規範性の高い生産集団がいたと考えられる。

瓦質播鉢が仙台北城周辺に多く分布することは、伊達氏の米沢から仙台北への移封に伴って、工人が移動した可能性が考えられる。また、Ia 類と在地的なタイプが共伴する事例が多いことから、内耳土鍋のように在地の生産体制も存在していたと考えられる。

(3) 三引両文漆器 (図 5)

伊達家家紋の三引両文が描かれた漆器で、椀身、椀蓋、皿、鉢、片口等の器種がある。三引両文は左右の線が湾曲する「しない三引両」が多い。また、中央の線が細くなるタイプ (1-SE223、7-16 号溝、24-KY2、25-SE529) がある。文様の構成は、外面に三引両文と草花文 (鳥文?) を 2~3 単位に配置し、内面中央に大きく三引両文、その周囲に外面と同じ文様を配置したものが多く、16 世紀後半とされる荒川 2 遺跡出土品に、内面に三引両文を描いたものが認められないことから、内面に文様を描くタイプは 16 世紀末に成立したと考えられる。その他、上下に界線を引きその間に細線と千鳥文等を描くタイプがある。

26 の米沢城と 7 の仙台北城の出土資料は器形、文様の構成等が共通しており、伊達氏移封の天正 19 年 (1591) を挟んだ、ほぼ同時期と考えられる。

出土する遺跡は、大浦 C 遺跡を除けば、伊達氏関連の伝承または文献史料のある遺跡に限られ¹⁾、米沢城、仙台北城など伊達氏の拠城からの出土が多い。

(4) 逆舟形露卯下駄²⁾ (図 6)

台の先端部が平坦で、後端部が尖り気味に丸みを帯びる形状の露卯下駄である。台の長さは 20~22cm、歯は幅の広い台形で、高さは 9cm 前後と高いものが多い。歯を取り付けるホゾは宮城、山形県のは 1 本だが、福島に 2~3 本のものが認められる。

下草古城跡 SK379 や城東町遺跡、川原町口遺跡出土資料以外は規格性が高く、平面形態はほぼ共通している。

No. 遺跡名	所在地	遺跡種別	内耳土鍋	瓦質播鉢	三引両漆器	露卯下駄	文献
1 下草古城跡	黒川郡大和町	城館		◎	○	◎	宮城県文報 154 集,1993
2 熊谷館跡	黒川郡富谷町	城館	○	○			富谷町文報 3 集,2001
3 大沢窯跡	黒川郡利府町	窯跡		○			宮城県文報 116 集,1987
4 山王遺跡	多賀城市	屋敷		○	○	○	多賀城市文報 9,45 集,1986,1997
5 高崎遺跡 11 次	多賀城市	屋敷		○		○	多賀城市文報 37 集,1995
6 鴻ノ巣遺跡	仙北市	集落		○			仙北市文報 32 集,1981
7 仙台北城二の丸跡第 9 地点	仙北市	城館	○		◎		東北大学埋文セン 1997『東北大学埋文調査年報 8』
8 仙台北城二の丸北方武家屋敷跡	仙北市	城館		○			東北大学埋文セン 2000『東北大学埋文調査年報 13』
9 仙台北城三の丸跡	仙北市	城館		○	◎		仙北市文報 76 集,1985
10 富沢遺跡 86 次	仙北市	集落				○	仙北市文報 220 集,1997
11 南小泉遺跡 17 次	仙北市	城下		○			仙北市文報 140 集,1990
12 養種園遺跡	仙北市	都市		◎	○		仙北市文報 214 集,1997
13 今泉城跡	仙北市	城館		○			仙北市文報 57 集,1983
14 今泉遺跡第 3 次	仙北市	城館		○			仙北市文報 185 集,1992
15 中田南遺跡	仙北市	屋敷		○			仙北市文報 182 集,1994
16 元中田遺跡	名取市	集落		○			名取市文報 40 集,1999
17 城南一丁目遺跡	山形市	城館	○				山形埋文セン報 69 集,1999
18 歌丸館跡	長井市	城館	○				長井市埋文報 19 集,2001
19 飯塚館跡	東置賜郡高畠町	城館	○				山形埋文セン報 2 集,1994
20 北小屋屋敷遺跡	米沢市	城館	○	○			山形埋文セン報 103 集,2002
21 上浅川遺跡	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 14 集,1985
22 東屋敷館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 58 集,1998
23 木和田館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 20 集,1987
24 大浦 C 遺跡	米沢市	城館	○		○	○	米沢市文報 33 集,1992
25 荒川 2 遺跡	米沢市	城館	◎	○	◎	◎	山形埋文セン報 40 集,1997
26 米沢城跡 (二の丸堀)	米沢市	城館	◎	○	◎		山形埋文セン報 66 集,1999
27 米沢城跡 IV 次	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 44 集,1994
28 米沢城跡 2 次	米沢市	城館	○	○			山形埋文セン報 89 集,2001
29 米沢城東二の丸跡	米沢市	城館	◎	○		◎	米沢市埋文報 68 集,2000
30 館山北館跡	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 79 集,2002
31 上谷地 c 遺跡	米沢市	集落	○				山形県埋文報 196 集,1995
32 我妻館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 50 集,1995
33 早坂山 b 遺跡	米沢市	寺院	○				山形県埋文報 154 集,1990
34 稲荷森館跡	米沢市	城館	◎	◎			米沢市埋文報 54 集,1997
35 暮坪湯ノ上遺跡	福島市	集落	○				福島市埋文報 84 集,1996
36 勝口前畑遺跡	福島市	集落	○				福島市埋文報 113 集,1998
37 大枝城跡	伊達郡梁川町	城館	○				梁川町史編纂委員会 1993『梁川町史第 4 巻自然・考古資料編 1』梁川町
38 輪王寺跡	伊達郡梁川町	寺院		◎			梁川町文報 14 集,1991
39 梁川城跡	伊達郡梁川町	城館	○	○			梁川町文報 6 集,1986
40 梁川城二の丸	伊達郡梁川町	城館		○			梁川町文報 20 集,2002
41 梁川城二の丸土塁	伊達郡梁川町	城館		○			福島県文報 94 集,1981
42 梁川城跡北三の丸跡	伊達郡梁川町	城館	○	◎			梁川町文報 16 集,1993
43 東昌寺跡	伊達郡梁川町	寺院		○			梁川町文報 14 集,1991
44 西山城跡	伊達郡桑折町	城館					桑折町埋文報,1986
45 二本木遺跡	伊達郡桑折町	集落		○			福島県文報 81 集,1980
46 大樫遺跡	伊達郡桑折町	集落		○			桑折町史叢書第 2 集,1985
47 本町遺跡	伊達郡桑折町	町屋		○		○	桑折町埋文報 12 集,1996
48 北前遺跡	伊達郡保原町	集落		○			保原町文報 3 集,1991
49 保原城跡	伊達郡保原町	城館	◎	◎			保原町文報 7,8,11,14 集,1993a,1993b,1994,1996
50 梅窪遺跡	伊達郡川俣町	屋敷		○			川俣町文報 14 集,1996
51 河股城跡	伊達郡川俣町	城館	○	◎	○	○	川俣町文報 19 集,2002
52 四本松城跡	安達郡岩代町	城館		○			岩代町教委 1976『四本松城跡』
53 小浜城西京館跡	安達郡岩代町	城館		○			岩代町文報 6 集,1990
54 安子島城跡	郡山市	城館	○				郡山市埋文 1993 安子島地区土地改良関連発掘報告 4
55 木村館跡	郡山市	城館	○	○			福島県文報 282 集,1992
56 三春条跡 3 次	田村郡三春町	城館	○				三春町文報 26 集,2000
57 近世追手門前通遺跡群 B 地点	田村郡三春町	城下	○	○			三井町文報 22 集,1995
58 近世追手門前通遺跡群 D 地点	田村郡三春町	城下	○				三春町教委 2000 三春町文報 26 集
59 城東町遺跡	会津若松市	屋敷				○	会津若松市文報 38 集,1994
60 川原町口遺跡	会津若松市	寺院				○	会津若松市文報 36 集,1994

○：1 点以上出土

◎：内耳土鍋・瓦質播鉢 10 点以上、漆器・下駄 4 点以上出土 (報告書掲載数)

表 1 「伊達氏系遺物」出土遺跡一覧

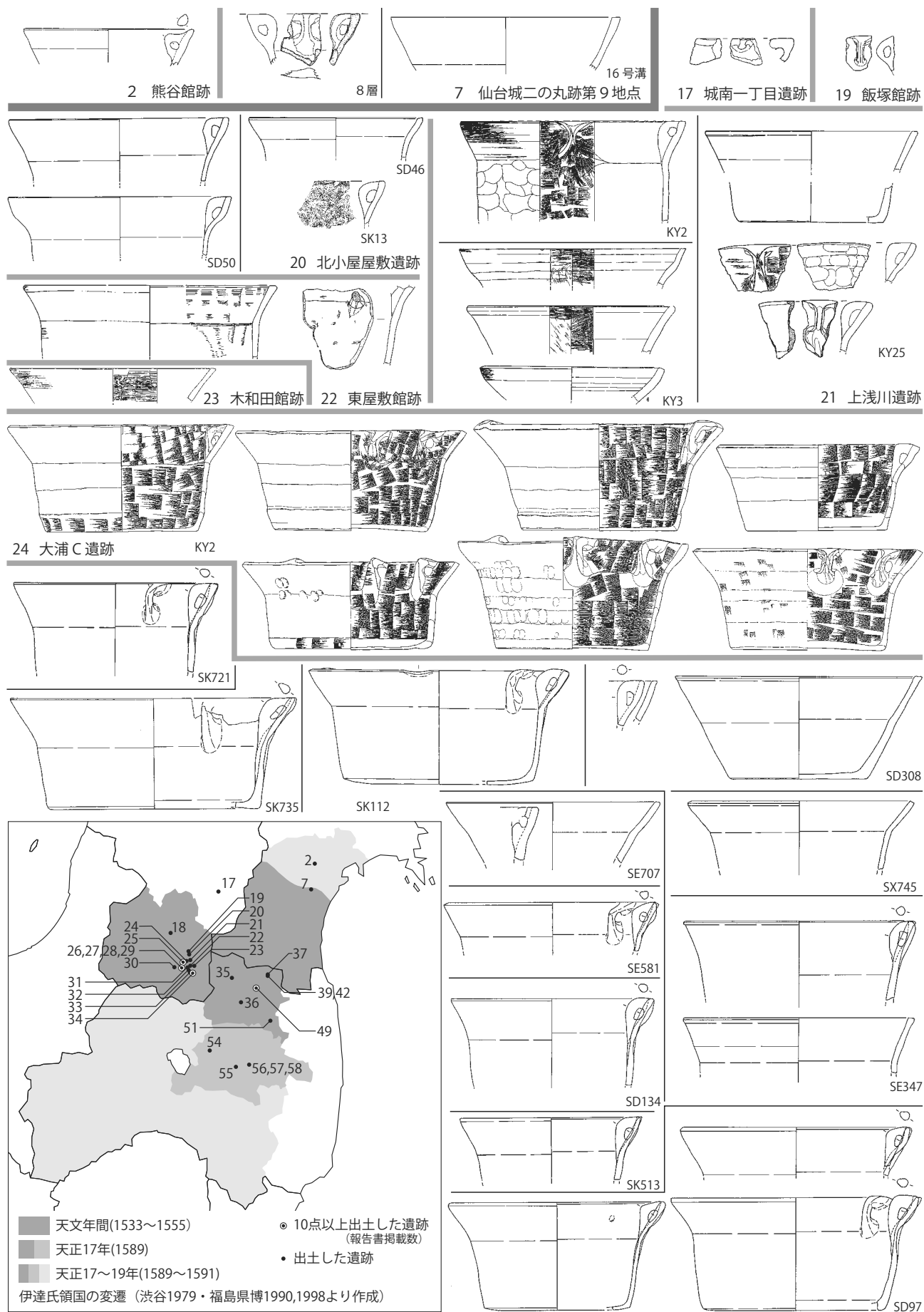


図1 各地の内耳土鍋とその分布 (1/8)

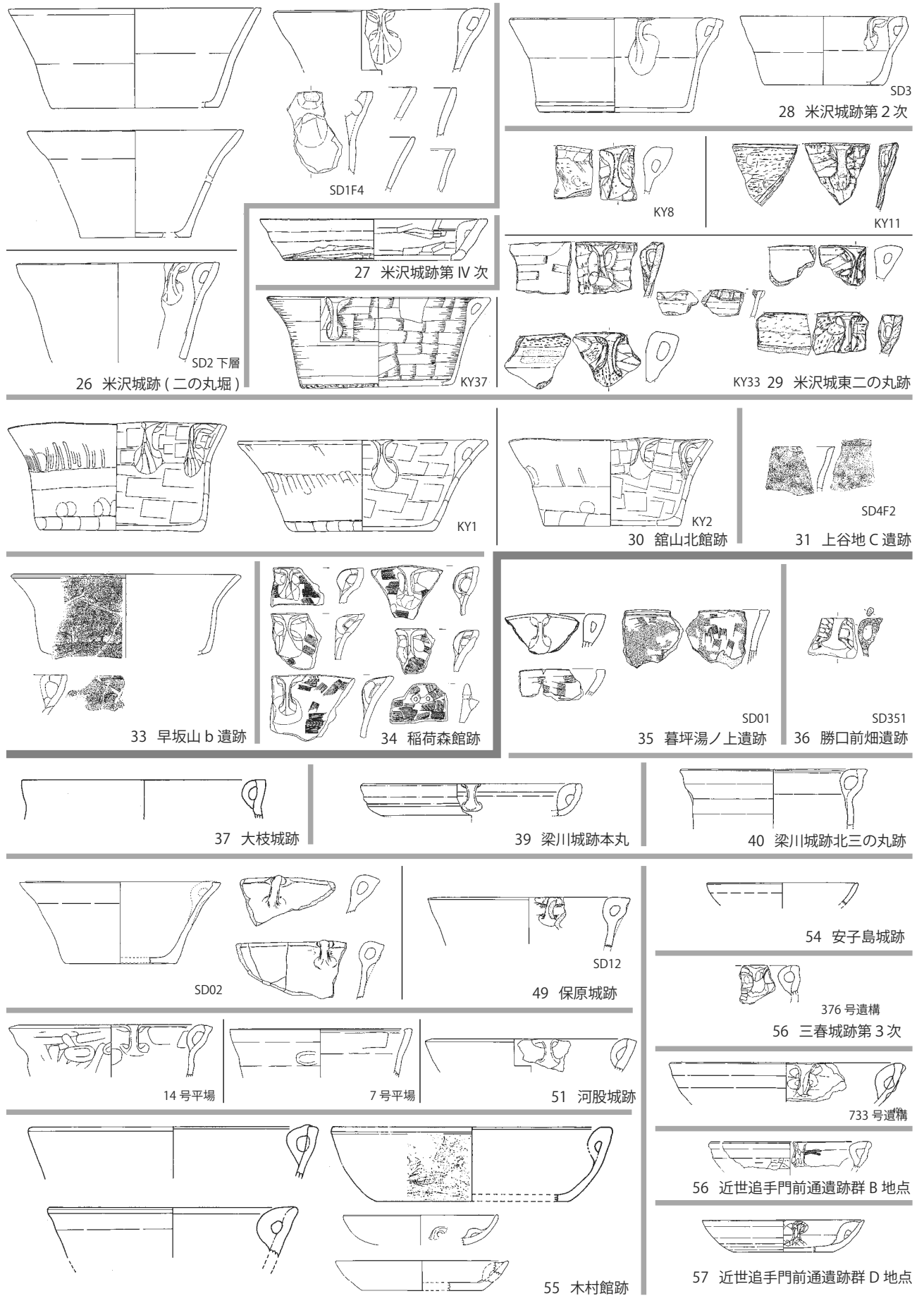


図 2 各地の内耳土鍋 (1/8)



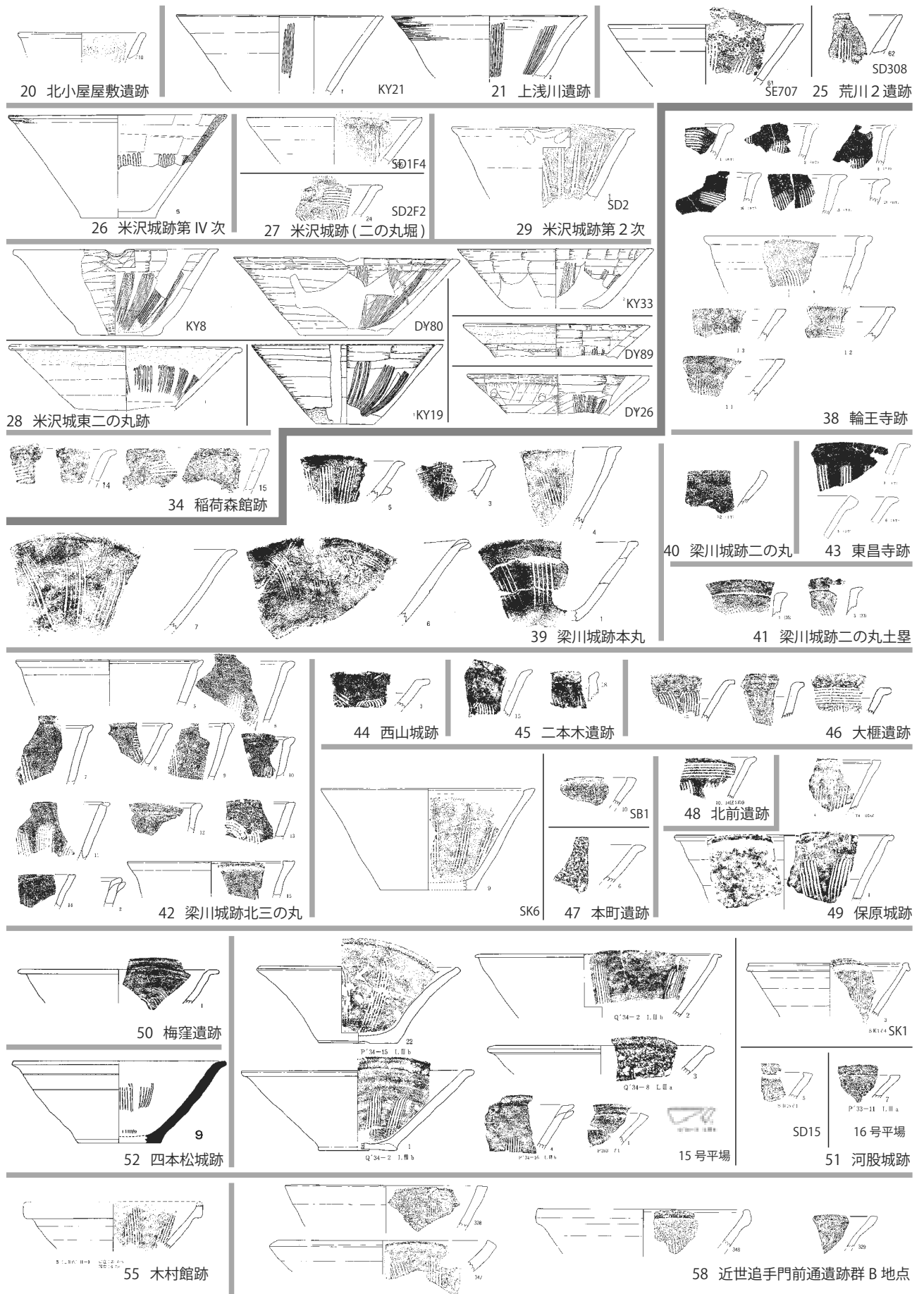


図4 各地の瓦質播鉢 (1/8)

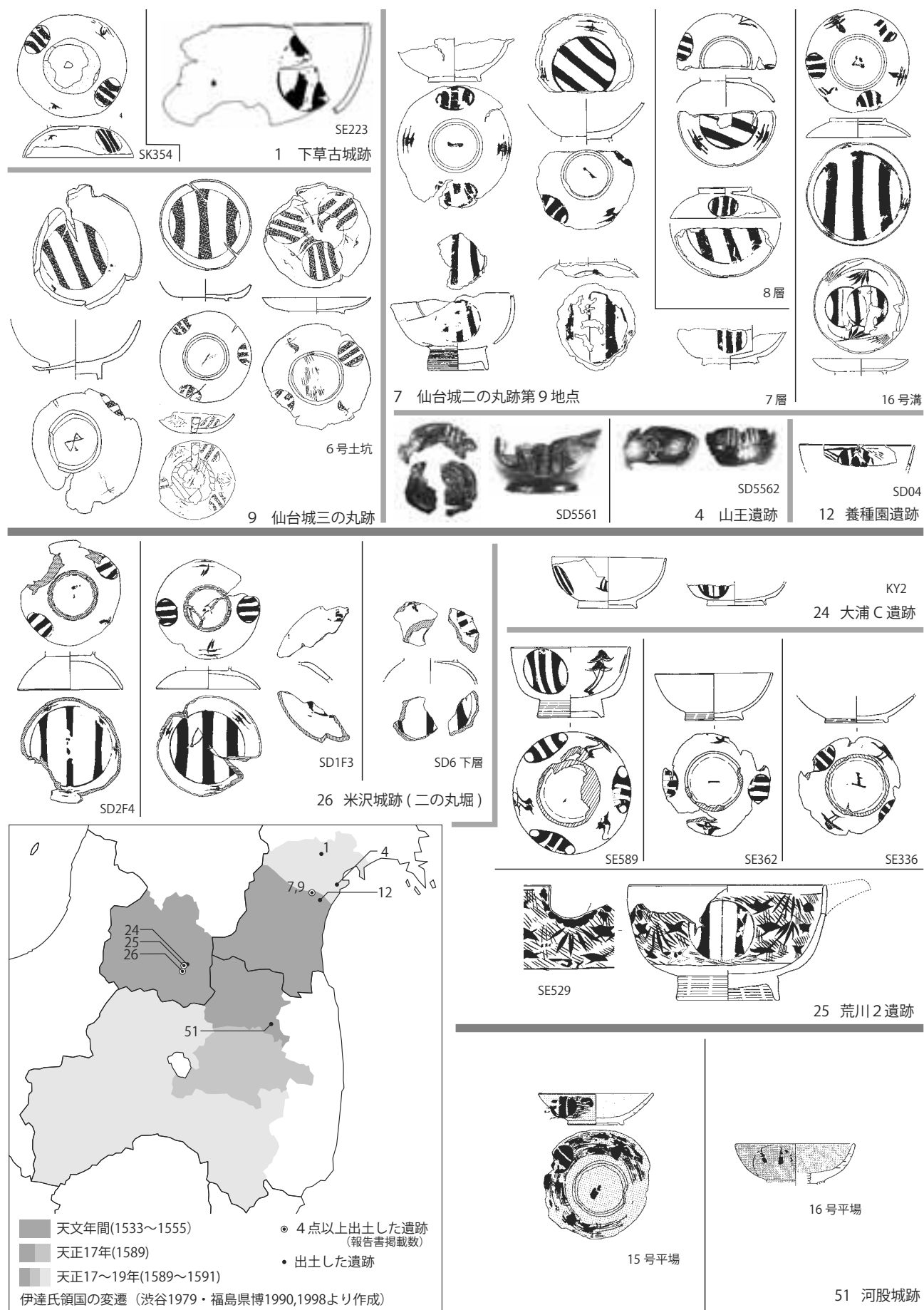


図5 各地の三引両文漆器とその分布 (1/6)

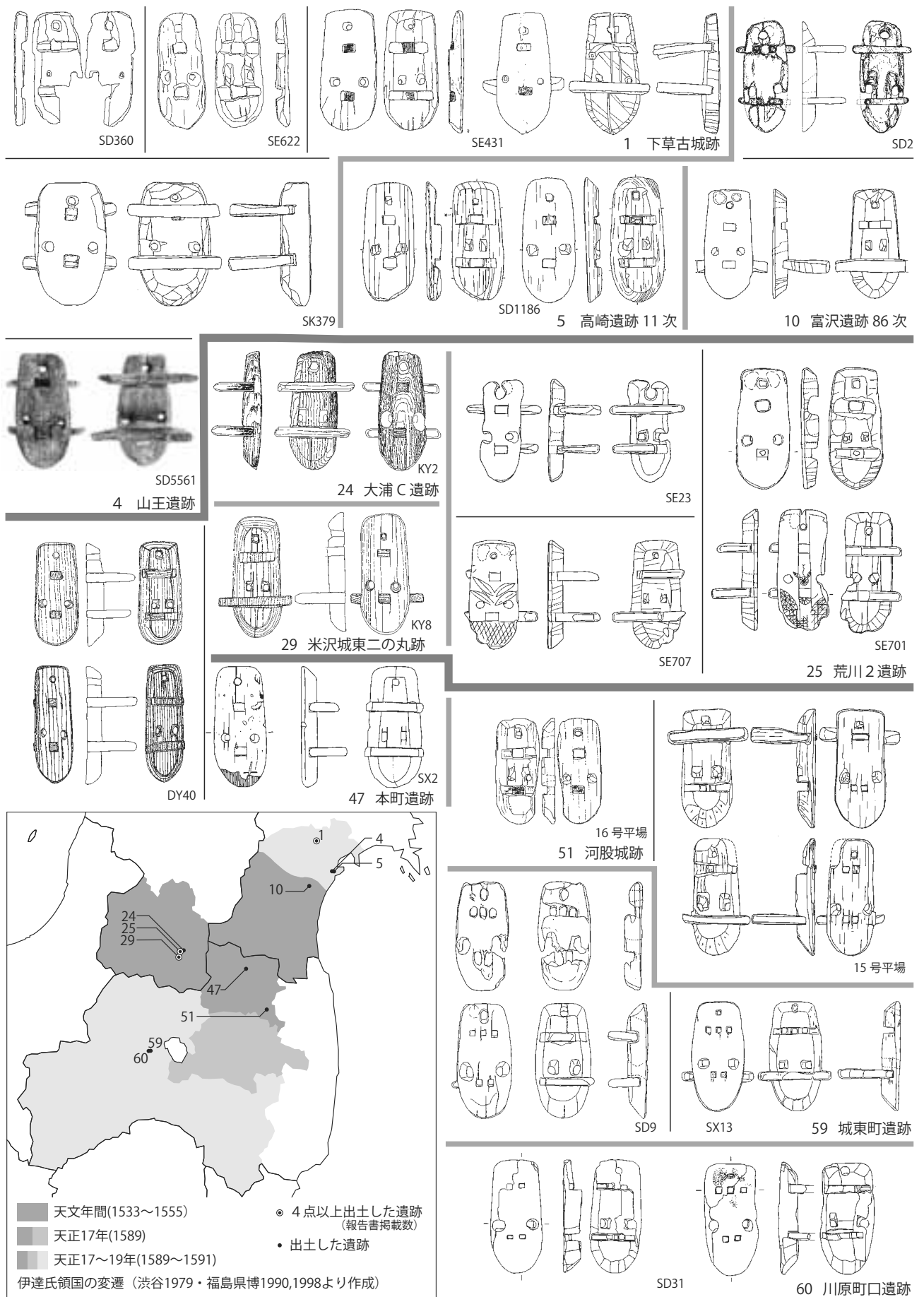


図6 各地の逆舟形露印下駄とその分布 (1/10)

下草古城跡、大浦 C 遺跡、荒川 2 遺跡、米沢城跡、河股城跡など、三引両漆器を出土する遺跡で出土する例が多い。

(5) 分布の比較

内耳土鍋と瓦質播鉢の分布地域に顕著な違いが認められる。これは前述した生産体制の違いによるものと考えられる。つまり、より在地的な内耳土鍋の生産体制と、領主の移封に伴って移動するような、領主への従属度の高い瓦質播鉢の生産体制との違いである。米沢盆地で瓦質播鉢が比較的少ないのは、寺院や城郭等の造営が低調だったためか、豪雪地域のため瓦葺きの建物が少なかったためであろうか³⁾。今後の検討を要する。

この生産体制の領主への従属度の高さがより鮮明に現れているのが三引両漆器の分布である。家紋という使用者が限定されるものであるため、より高度な職人支配が要求されたと考えられる。家紋を描く専門の職人がいた可能性もあり、塗膜分析等の自然科学的な分析も含めて検討する必要がある。

逆舟形露卯下駄の分布が三引両漆器とほぼ重なることは、今回の集成では意外な結果であった。その特殊な形状と分布、荒川 2 遺跡にみられる線刻を施した下駄の存在等から、何らかの儀礼的な使用のあり方があった可能性を指摘しておきたい。伊達氏の支配期間が短かった会津地方で出土している点も、この下駄の性格に関わるのかもしれない。

3 まとめ

表題に示した「伊達氏系遺物」の定義もしないまま書き進めしまったが、生産体制や遺物そのものの性格の違いによって分布地域を多小違えながらも、珠洲と常滑に

代表されるような中世前期以来の流通圏を跨いだ地域に共通した遺物群が分布していることは、政治的な要素を考えざるを得ず、以上の 4 種類の遺物は「伊達氏系遺物」または「伊達セット」とでもいうべき、伊達氏との関わりが強い遺物であると考えられる。

最後に、図 7 に「伊達氏系遺物」のうち 2 種類以上が共伴している遺構について、共伴遺物や内耳土鍋の年代観によって変遷を図示した⁴⁾。16 世紀前半に 3 種類以上が共伴するセットが成立し、伊達氏の本拠の移動に伴って、各地の拠点的な遺跡で出土するようになる。

17 世紀中葉以降、三引両文を描く漆器が消滅し（関根 1998）、内耳土鍋はその用途と形態を変え（高桑 2003）、播鉢は近世的な広域流通品である岸窯系の陶器（関根 2000）がとってかわり、「伊達セット」は消滅することとなる。

今後、個々の遺物の特徴や詳細な年代観、伊達氏の職人支配のあり方、また、領主名を冠した遺物群の名称が妥当かどうか、他地域との比較などが検討課題である。

註

- 1) この他、山形県鶴岡市鶴ヶ岡城跡（山形埋文 2002）、北海道ノ国町向井宅遺跡（上ノ国町教委 1999）で三引両文漆器が出土している。これらの遺跡の伊達氏との関わりは不明であり、単なるデザインとして三引両文が用いられる可能性もある。しかし、今回集成した資料については、伊達氏領国内という遺跡の立地や遺跡の性格から、伊達家の家紋として三引両文が使われていることは確実と考える。
- 2) 平面形態が舟を前後逆にした形状に類似することから、このように仮称しておく。
- 3) 瓦質土器工人と瓦工人の同一性が指摘されている（飯村 1997）
- 4) 時期区分については福島県中近世部会 10 期区分（福島県中近世部会 1997）をもとに伊達天文の乱前後を境に 6 期前半を 2 分した。

引用参考文献

- 飯村均 1997 「中世食器の地域性 2—東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集
 上ノ国町教育委員会 1999 『町内遺跡発掘調査事業概報 II』
 渋谷敏己 1979 『戦国期伊達領下の郷村制の変化と「村」の成立について—置賜地方の場合—＜資料編＞』昭和 53 年度山形県長期
 研修報告並びに同年度文部省奨励研究 (B) による研究報告
 関根達人 1997 「6. 木製品・漆器 (1) 供膳具」『東北大学埋蔵文化財調査年報』9
 関根達人 2000 「7. 考察 (2) 土器・陶磁器の検討」『東北大学埋蔵文化財調査年報』13
 高桑登 1998 「山形県内陸地方」『東北地方の在地土器・陶磁器 II』東北中世考古学会第 4 回研究大会資料
 高桑登 2003 「内耳土鍋」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院（近日刊行予定）
 高橋圭司 2002 「第 4 節 中世後期～近世初頭の遺構と遺物」『河股城跡発掘調査報告書』川俣町文化財調査報告書第 19 集
 福島県中近世部会 1997 「かわらけ編年の再検討（その 2）」『福島考古』第 38 号
 福島県立博物館 1990 『企画展 秀吉・氏郷・政宗—奥羽仕置 400 年—』図録
 福島県立博物館 1998 『企画展 戦国の城—天守閣への道—』図録
 (財) 山形県埋蔵文化財センター 2002 『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集
 山中雄志 1996 「第 4 章 考察とまとめ」『本町遺跡発掘調査報告書』桑折町埋蔵文化財調査報告書第 12 集